

子育てと健康
東大社研パネルデータを用いた分析

竹内麻貴（山形大学）

目的

本報告の目的は、親への移行が健康に与える影響を明らかにすることである。親への移行は、子育てによる心理的・対人関係のストレスを伴うことが多く、それが健康に影響を及ぼす可能性がある。しかしながら、親への移行と健康の関連に着目したパネルデータ分析は少ない（Mckenzie & Carter 2013）。日本のパネルデータを用いた分析では、子ども数が母親のディストレスに与える効果は他の変数と比較しても大きいことが報告されているが（余田 2018）、そのメカニズムや子どもの成長による影響については検討されていない。また、先行研究の多くは男性の親への移行が健康に与える影響を考慮していない。本報告では、これらの未着手の分析課題について、東大社研パネルデータの分析を用いた分析をおこなう。

方法

分析には、東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトが実施している「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」（Japanese Life Course Panel Surveys: JLPS）の第1波（2007年）から第13波（2019年）のパネルデータを用いる。親の健康（従属変数）の指標には、「メンタルヘルス」と「主観的健康」を用いる。メンタルヘルスの指標には、Mental Health Inventory（MHI-5）を用いる。過去1ヶ月間で「かなり神経質であったこと」、「どうにもならないくらい気分が落ち込んでいたこと」、「落ち着いておだやかな気分であったこと」（反転）、「おちこんで、ゆううつな気分であったこと」、「楽しい気分であったこと」（反転）の5項目について、どれくらいの頻度で感じたかを「1. いつもあった」から「5. まったくなかった」までの5件法で尋ねている。分析では、メンタルヘルスが良いほど値が高くなるようにしたうえで、5項目の点数を合算した値を用いる。主観的健康の指標には、「自分自身の健康状態についてどのように感じているか」を尋ねる質問を用いる。「1. とても良い」から「5. 悪い」までの5件法で得た回答を、健康状態が良いと感じているほど値が高くなるように反転している。親への移行（独立変数）を表す変数には、第一子の情報から作成した「子どもの誕生経験」および「子どもの年齢」を用いる。子どもの年齢については、子どもが15歳になるまでの効果を分析する。分析対象は、第1波から継続して調査対象（継続サンプル）となった男女（2007年時点で20歳から40歳）である。使用する変数に欠損があるケースを除外すると、分析に用いるサンプルサイズは女性で約1,700、男性で約1,500となる。

結果

記述的分析では、男女ともに第一子が乳児の頃にメンタルヘルスが最もよく、その後は悪くなっていく傾向がみられた。ただし、基本属性をコントロールした固定効果モデルでは、女性のメンタルヘルスと主観的健康に対してのみ影響がみられる。女性においてのみ、子どもの誕生経験はプラスの影響をもつが、子どもの成長はマイナスの影響がある。

付記

本研究は、日本学術振興会（JSPS）科学研究費補助金・特別推進研究（25000001, 18H05204）、基盤研究（S）（18103003, 22223005）の助成を受けたものである。東京大学社会科学研究所（東大社研）パネル調査の実施にあたっては、社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けた。パネル調査データの使用にあたっては東大社研パネル運営委員会の許可を受けた。

キーワード：子ども、健康、パネルデータ